農家のヨメ?!通信 VOL.5

農家に嫁いで感じた
「？」や「！」をお届けします。
農家の暮らしは、
かなりオモシロイ！

ヨメ?!

十勝で約100年続くとやま農場の長男と、2015年2月に電撃入籍。雑誌の編集を続けながら、休日には農場の仕事を手伝う。クナウマガジンが発行する「northern style スロウ十勝」でヨメ?! 通信を連載中。

次男のこと

結婚してからの1年半。4男と、十勝勤務になった3男とも一緒に暮らしてきた。「息子たちが成人してから、こんな風にみんなで暮らすなんてね」と、母もよく言っていた。それが、今年の7月。急に次男が家に帰って来ることになった。転職の間だけの同居だが、私にとっては、まさかの4兄弟全員との共同生活が実現することになったのだ。

次男とは、結婚前に一度会って以来、調理師という休みの少ない仕事上、冠婚葬祭の場面ですら、ゆっくりと話す時間がなかった。他の兄弟から、大食いであること、モノマネが上手なこと、犬のチロが大好きなことなどの断片的な情報を得てはいたが、私にとってはまだまだ謎の多い人物だった。

兄弟の中では一番背が高く、柔道をやっていたこともあってガタイも良く、顔は夫とそっくりで（今、一緒に居るようになってみると結構違うことに気づく）、手先が器用。次男が帰ってきてからの我が家の食卓は、一気に華やいだ。次男の帰宅で張り切っているのはじいちゃんで、「早く起きろ」「寝るぞ」と次男を急かし、文字通り寝食を共にしている。

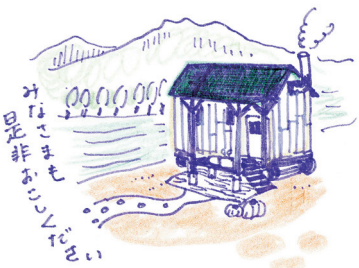
週末、札幌にいる4男も帰って来て4人揃えば、相手を変えては相撲を仕掛けて楽しんでいた（ちなみに夫は戦わずして負けるタイプ）。せっかくみんなが揃ったからと、私が提案したのは、兄弟の集合写真のビフォーアフター。昔の写真と同じポーズで並んでパチリ。約20年の歳月は、背丈も体型も顔立ちも変えた。それぞれの心の内も、きっと変わっていることだろう。それでも4人仲良く、こうして過ごせることに、月並みだが兄弟っていいなぁと思う。ちなみに、私から見た次男は、4兄弟一笑顔がチャーミングだと思う。

イモ植えにみる人生

ゴールデンウィークはイモ植えの真っ最中。渋滞のニュースをよそに、私も「この時ばかりは！」と、張り切って畑に出る。イモは、植えるときも収穫のときも、ネコの手も借りたいほどの作物。我が家では食用の男爵とメークイン、加工用のトヨシロとスノーデンのほかに、今年はキタアカリも植えた。夫はトラクターの運転手。後ろのポテトプランターに乗る私は、ひとつのカップ（受け皿）にひとつのイモが入るようチェックして、ふたつ重なったり、あるいは入っていなかったりというトラブルを防ぐ役割だ。

流れていくイモをず〜っと見ていると、おとなしくトレイに乗って運ばれていくもの、あちこちぶつかって脱落していくもの、すでにイモが入っているのに、その上にちゃっかり乗っかっているもの…etc。それぞれの性格（？）が滲みでていて、まるで人生の縮図のようなのだ。もしも自分がイモだったら…。そんなことを考えながらのイモ植えだった。

暗闇の価値

今年4月下旬。昨年から計画していた家が出来上がった。じいちゃん、母、私たち夫婦、そして現在十勝在住の3男、次男の6人暮らし。十勝産のカラマツ材と珪藻土の塗り壁が主体の、日高山脈と畑が見える家だ。同時に、世界最大の民泊サイトairbnbにも登録し、少しずつだが国内外から宿泊客が訪れるようにもなった。もともと修学旅行生や農業実習生などを受け入れてきた経験があることから、家族以外の人が家に居ることにも慣れっこ。じいちゃんも積極的に（日本語で）コミュニケーションを取っている。

訪れた人に好評なのは、意外にも夜の暗闇。我が家の周りには外灯がないので、当然だが夜は真っ暗。晴れていれば、頭上いっぱいに星空が広がり、耳をすませば、風の音、鳥のさえずり、森からは動物の鳴き声が聞こえることもある。自然に抱かれていると、自分という存在がちっぽけに感じられる。民泊を機に、もっと多くの人にこの場所の素晴らしさを感じてもらいたい。